



# のいる風景

## 富士 國治 さん



【ふくし くにじ さん】 66歳 支笏湖温泉  
●支笏湖まつり実行委員会 実行委員長

今年の「千歳・支笏湖氷濤まつり」は1月27日～2月19日に開催します。

### 1年を通して楽しめる 支笏湖の魅力伝えたい

「子どもの頃から『湖水まつり』の花火大会が、何よりの楽しみでした」と笑顔を見せるのは、支笏湖地区で生まれ育った富士國治さん。平成21年から支笏湖まつり実行委員会の実行委員長を務める。

夏の風情を感じる「支笏湖湖水まつり」は昭和28年から始まった。メインイベントとなる花火大会には、道内各地から観光客が押し寄せ、大変な賑わいをみせたという。

「当時、支笏湖が活気づくのは夏だけ。私は支笏湖の四季を見て育ったので、その美しさがよく知られていないのもったいないと感じていました」と話す。1年を通してにぎわいを求める声は支笏湖地区全体で高まり、昭和52年から2つのイベントが始まったという。

一つは、支笏湖の春を知らせる安全祈願祭「支笏湖水開き」。現在では、遊覧船に乗った支笏湖小の児童が「観光シーズンの扉を開ける」大きな鍵を

支笏湖に投げ込むほか、ヒメマスの稚魚の放流が行われている。

もう一つは、紅葉で彩られた支笏湖の秋を伝える「支笏湖紅葉まつり」。ヒメマスときのこがたっぷり入った名物「味覚汁」を求め、大勢の人が列を作って並ぶ。支笏湖小鼓笛隊のパレードや吹奏楽などの演奏も訪れた人を喜ばせている。

「困ったのは冬でした。いてつく寒さの中に、どうやって観光客を呼び込むか」と頭を悩ませたという。当時、道内の他市町村で実施されていた冬のイベントを視察し、千歳の気候条件にあわせて考えたのが「千歳・支笏湖氷濤まつり」。

平成28年は26万6千人が訪れるなど、北海道を代表する冬の祭典となった「氷濤まつり」だが、昭和54年に始まった当初は試行錯誤の連続だったという。

第1回から映像制作スタッフとして参加し、平成6年に会場制作管理

部長に就任した富士さんは、かつての現場を振り返り、明るく笑う。

「まつりの氷像は、骨組みに支笏湖の水をスプリングラーで吹きかけ、凍らせて作ります。湖水を運ぶホースの中に落ち葉が詰まって凍ってしまい、ホテルの温泉の湯船に入れて溶かしたこともありました」。

昼間は、氷像が「支笏湖ブルー」と呼ばれる淡い青に輝く。この青色は氷に厚みをもたせることで生まれるという。そのため、水を吹きつける作業は、極寒の中、長い時間を掛けて行われる。美しい氷像は「支笏湖の自然の力と制作スタッフの努力の結晶」と言葉に熱がこもる。

支笏湖は「自然の神秘性が保たれた他にはない観光地」という富士さん。「カメラやダイビングなど自然のアクティビティも豊富。これからも愛する支笏湖の魅力を伝えていきたい」と語ってくれた。